
サンドリヨン

宮森すず

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サンドリヨン

【Nコード】

N3609L

【作者名】

宮森すず

【あらすじ】

現代版・ロミオとジュリエット。

大学生になった璃桜と社会人の夏木のお話。

(KOOL番外2・短編連載)

緑陰も涼しげな五月某日。キャンパスの中庭では色とりどりのバラのつぼみが自然の理に従い、密やかにほころび始めていた。法学部の建物からバラの小路をぬけ、図書館に向かっていた九条璃桜は咲き初めの一輪に目をとめ、雪白の花弁にそつと指をのばした。

「やっぱり絵になるね、^{ミス・ルージュ}紅薔薇姫がやると」

ミス・ルージュ？ 聞きなれない単語に小首をかしげながら振り返ると、分厚い紙の束を手にした見慣れない生徒が立っていた。

「何か、ご用？ それとも人違いかしら」

初対面だと判断して微笑みかける。相手は女性だったが、スーツを着てネクタイを締めていた。学生だと思ったのは、せいぜい高校生にしか見えない幼げな顔立ちのせいだ。

「人違いじゃないよ。九条璃桜さんでしょう？ 今年のプロムは間違いなく貴女が主役だ。皆、貴女が紅薔薇姫に選ばれると思っているよ」

「皆？ 少なくとも、私は貴女のおっしやる『ミス・ルージュ』が何なのか見当もつかないわ。それから貴女のお名前も」

「これは失礼しました。僕は今年のプロムナード実行委員、審査員をやらせてもらっています、瓜生津です。いちお、指揮科のM2です。でもって、」と言いながら、瓜生津は手にしていた紙束の一枚をこちらに差し出した。「これがプロムのポスター。クイーンとキングとして毎年一組のカップルが最後に選ばれる。その女性のほうを『紅薔薇姫』って呼んでいるんだよ」

「M2？」

差し出されたポスターよりも、その言葉が気になって繰り返す。

「うん、そうだよ。当日はちゃんと生オケで、僕が指揮もやるよ。あ、曲目、知りたい？」

「貴女、おいくつ？」

「十九。バチエラは去年アメリカで取ったから」

「瓜生津……、もしかして、お父様は王立音楽院で教鞭をとってらっしゃる？」

「え、うん。よく知ってるね？」

「私、昔貴女のお父様にピアノを教えていただいたことがあるわ。そう、先生のお嬢様だったのね。先生はお元気？」

「知らない」

急に態度を硬化させた少女に戸惑う。そういえば、先生から娘の話聞いたことがない。自分の娘と同じくらいの歳の生徒を持つていれば、一度くらい話題にのぼってもよさそうなものだ。聞いてはいけなかったかしら、と口をつぐもうとした途端、

「ねえ、紅薔薇姫は誰と一緒にプロムに出るの？」瓜生津が強引に話題を変えた。

「プロム……ダンスパーティーね。せっかくだけれど、私は出席するつもりはないの。それから、今後、ミス・ルージュと呼ばれても返事はしません。私の名前はご存じでしょう？」

「それじゃあ九条さん。どうしてプロムに出ないの？ダンスは嫌い？貴女が出てくれないと、皆がっかりするよ。炭酸の抜けたコーラ！結婚式に浴衣！パンダのいない動物園！……それくらいがっかりだよ」

くすりと笑う。ヘンな人……、そう思ったが悪い相手ではなさそうだ。子供っぽい素直さがむしろ清々しい。

「プロムには興味がないけれど……あなたの音楽には興味があるわ」

「え、それじゃあ」ぱ、と顔をあげる。「絶対来てね！待ってるから！」

「あ……」

それだけ言い残すと、瓜生津は「やったあ」と叫びながら駆け出していった。止める暇もあらばこそ、「絶対だよ」という間延びした声だけが、バラの茂みの奥から、五月の風につてふんわりと運ばれてきた。

手元に残されたポスターに目を落とす。プロムは二週間後の金曜日。璃桜はすこしだけ迷って、結局その紙を鞆にしまった。

瓜生津に「誰と」と聞かれたとき、最初に浮かんだのは夏木咲也の顔だった。

「さっちゃん、今なにをしているかしら……」

講義の合間、練習室にいるとき、大学からの帰り道、ふとした瞬間に想う。高校卒業後に離れ離れになり、その後一年ちかくも連絡をとらなかった。いや、とる勇気がもてなかった。時間が必要だったし、何よりも自分の気持ちに確信をもちたかった。

覚悟、と呼んでもさしつかえない。璃桜自身、初めて身を置いた自分との対面の中で、答えは最初からずっと自分の裡にあった。

だからその答えを両手でしっかり離さないように、大事に持ち続けていこうと決めたのだ。

我慢なんてしない。

自分の気持ちに素直に動く。

心なんて移ろいやすいもの、だとしたら、ただその一時の気持ちを大事にすればいい。

我が儘、かしら。

それでもいい、と思う。少なくとも、自分の気持ちと行動の責任は自分に跳ね返ってくる。それを受け止めて、生きたいだけだ。

1 (後書き)

誕生日、おめでとう。

璃桜はいつものように夏木に手紙を書くと、そこにプロムのチケットを一枚同封した。開始時間は金曜日の午後七時。食事、音楽、おしゃべり、ダンス、そんな時間が日付の変わる時刻まで粛々と続く。プロムナードには色々なスタイルがあるけれど、ドレスコードを見る限り、今回はごくクラシックな様式のものようだ。

それとも、「古臭い」のほうが適当かしら。

璃桜はこれまでもパーティと名のつくイベントには何度も出席してきた。そういう家庭に育ち、自分に求められている『九条家の跡とり』としての役割も、正確に理解しているつもりだ。

それでもパーティは退屈で、飛び交う美辞麗句は馬鹿らしかった。微笑んでうなずくことを繰り返しながら、「今、隣にいるのがさっちゃんだったらな」何度そう思ったことが。

璃桜をエスコートした男性達は皆ジェントルでスマートではあったものの、絶対必要条件を満たしていない。

彼らは、夏木咲也ではないのだ。

パーティの間中、つくり笑いを浮かべていることに飽いて、夏木にエスコートを頼んだこともある。「さっちゃんだけ行かなくていいなんてずるい」なんて、なじったこともある。

そのたび、夏木は困った力才で、「私は行けないよ」と繰り返した。今は遠い記憶。

エスコートはしてくれなかったけれど、夏木は迎えに来てくれるようになった。パーティがお開きになる時間に合わせて、運転手と一緒に会場まで来てくれる。

「さっちゃん、遅いわ」

「お待たせ、璃桜」

こんな会話を何度交わしたことだろう。それが自分に与えられた

『代償』だと、気づくまでに長い時間がかかってしまった。

あまりにも、幸せだったから。

あまりにも、大切だったから。

それでも、他人から与えられた『代償』は、歪で、脆くて、儚くて、偽物にすぎなかった。

そこに『彼女』の意思はない。

それが許せないくらいには、自分は、本気だったのだ。

すつ、と璃桜は大きく息を吸い、吐き出した。まだ間に合う。必ず取り戻してみせる。間違えは正せばよい。そう、思っていた。

プロム当夜。

カレッジには朝からどこか浮かれた雰囲気漂っていた。ふだんと同じように講義を受けながら、璃桜も上の空でいる自分に気づいていた。

イブニングドレスは夜のように深い紺色。

ハイヒールは後ろ姿も美しいリユクスなシルバー。

長手袋。涙を模した一粒の宝石。センシユアルなミドルノートの香水。

それからリムジン。

手はずは全て整えた。車以外は、すべて夏木咲也の元に届けられている。リムジンは直接会社に迎えに行かせる。あとは、本人が来てくれさえすればいい。

祈るような気持ちで夜を待つ。想像の中で、夏木は自分の選んだドレスを着て、リムジンから下りてくる。なんて声をかけよう。心が躍る。きっと来てくれる。きっと。

午後七時。

空はいくつものグラデーションを経て、闇色に染まるうとしていく。さざめく声。衣擦れの音。着飾った生徒たちが続々とボールルームに姿を現す。

いろとりどり、デザインも様々なドレスを見にまとった女生徒たちは、パートナーに腕を預け、誇らしげに靴音を響かせる。その姿は中庭に咲き誇るバラに似て、美しく華やかに夜を彩る。

入口でボーイからドリンクを受け取りながら、璃桜は夏木の姿を探す。室内にも、ボールルームに面した中庭にも、彼女の姿は見当たらない。

仕事が長引いているのかしら。

そつと壁に背中をもたせかけ、璃桜は胸元のネックレスに手をやる。細い鎖の先には、クローバーを模したチャームがついている。可愛らしいデザインだが、今の服装にはすこし物足りないと思わせるほど、ささやかなものだ。けれど璃桜はあえて、それ以外のアクセサリをひとつも身につけなかった。

さっちゃん、似合うつて、言ってくれるかしら。

そのネックレスは、去年のクリスマスに、夏木から贈られた特別なものだ。最初に夏木に見てもらいたくて、今日まで大事にしまっておいた。

「まるで白薔薇だ。ミス・ルージュ 紅薔薇姫じゃなくて、ミス・ブランシュ 白薔薇姫に改めるべきだったね！」

「……こんばんは、瓜生津さん」

「ごきげん麗しゅう、ミス・ブランシュ」

そう言つて、燕尾服を着込んだ指揮者は、差し出されてもいない璃桜の手をとった。手の甲にキスをする仕草を、璃桜は無言で受け流した。

「驚いたなあ。やっぱり本物は違うね。模造の花の中に一輪、生粋のバラが混じっているみたい。すぐに、貴女だってわかったよ」

言いながら、手品のように手のひらの中から、一輪の赤いバラを取り出す。

「レッドクイーン……。中庭にはなかった品種だわ」

「ご名答。貴女のために用意したんだ。気に入ってもらえたなら、抱えきれないくらい大きな花束であげる。貴女には、その価値があ

るもの」

「それは、」

「鏡で自分の姿を見てごらんよ。僕の言葉が正しいってわかるから。言っただしよう、今夜の主役は貴女だ。その主役が、こんなすみっこで壁の花をやられていちゃ、プロムは始められないよ」

皆、待っているよ。こっそりと囁かれる。その言葉のとおり、いつの間にかボールルーム中の視線がふたりに注がれていた。弓を構え、今か今かと指揮者を待つオーケストラのメンバーさえ、調弦の手をとめてこちらに注目している。

「今夜は貴女の演奏を聴きにきたの。ダンスをしに来たのではないわ。私を退屈させないで」

瓜生津はくすりと笑い、「As you wish, my lady」と答えて離れた。いつの間にか、レッドクイーンは璃桜のドレスの胸元を彩っていた。

「似会っているよ、お姫様！」

言い残して、オーケストラの方へ走っていく後ろ姿を見ながら、璃桜は心の中で「さっちゃんのバカ」と呟いていた。

ひっきりなしに続くダンスの申し込みに倦み、断ることに疲れ、璃桜はこっそりとボールルームを抜け出して中庭に出た。

夜風は弦楽器の調べを連れてきた。

瓜生津の才能は本物だ。

音の色彩が、宝石のように揃った音の粒が、閉ざしているつもりの心を震わせる。

才能と、才能を磨くための努力と、タイミングさえも味方につけた者にだけ与えられる輝き。それを瓜生津に感じた。

本物、と呼んだ彼女こそが本物だ、と璃桜は思った。

月に向かって手を伸ばす。広げた手のひらの先に星がまたたく。幽かだが濃厚なバラの芳香に包まれながら、璃桜はひどく寂しかった。

「せっかく、初めて、つけたのに……」

指先でチャームをなぞる。ぎゅ、と握りしめる。そのまま首の後ろに両手を回し、留め金を外した。

幸運を運ぶ四つ葉のクローバー。頭の奥で鳴り続けるヴォカリーズ。雪の音楽室。――触れた唇の感触。

「さっちゃんの、バカ……」涙がこぼれた。

「私が、欲しいのは、……っ」息がつまる。

夜風に煽られ、ドレスのドレープが揺れる。真珠の髪留めを外し、まとめていた髪をほどく。肩にかかる髪を払い、涙をぬぐった。

「おい、お姫様！ そんなところにいたの。皆、貴女を待って……」

指揮台を放り出してきたのだろう瓜生津が、途中で言葉を呑んだ。振り返らなければ、そう思うのに、肩の震えが止まらない。

「何で……、泣いてるの？」

瓜生津が息を呑む気配。

「何があつた？ 何か言われた？」

「……でも。何でも、ないわ」

「何でもないって、……カオですか」

正面に立たれ、苦笑して質される。のばされた指を避けるだけの気力もなく、璃桜は大人しく涙をぬぐわれる。

「それとも、誰かを待ってるの？」

その言葉に、また新しい涙が生まれる。

「なんだ、そっか……。ひとりで来ていたから、変だと思ったよ。九条さんが、誘われないわけないし。他にもいっぱい、相手はいるだろうに。……そのネックレスの人？」

握りしめていた手に絡みついた細い鎖。瓜生津は璃桜の手をとり、

指を一本一本、丁寧にほどかせた。

「跡がついてる」

きつく握りしめていたせいで、手袋越しにキズがついている。その手のひらに、瓜生津はそつと唇を寄せた。

「んっ……、瓜生津さん、」

手袋を通して、瓜生津の舌の感触が伝わってくる。引こうとした手のひらからネックレスが滑り落ちる。

「相手が誰かなんか知らないよ。知りたくもない。でも、誰も、貴女にこんな力才させていいわけがない」

ネックレスを拾おうと身をかがめかけた璃桜の身体に、瓜生津の腕がまわる。抱きしめられている。そう認識するよりも先に、瓜生津の怒りが伝わってくる。

「……離して」

「僕なら絶対、貴女にそんな力才はさせない」

「離して、瓜生津さん。ネックレスを、拾わなきゃ」

「貴女に会いに来ないヤツのことなんか、忘れてしまえばいい。貴女を悲しませるヤツのことを、何で、貴女は、そんなに……」

「好きだもの。大好き、だもの
そう。」

好きだから、会えなくて寂しい。

会いにきてくれなくて、悲しい。

本当はずっと一緒にいたい。

今はたとえ、叶わなくても。

切なくて苦しいこの気持ちをずっと手放さないと、決めたのだ。

「僕だって貴女のことが好きだ！」

「瓜生津さ、」

風がざわめきを運んできた。ボールルームに広がる波紋の音を、そのままさざ波にして空気の湖面が震える。璃桜は直感的に振り返ろうとした。それを瓜生津が阻む。

「好きだ、……璃桜」

両の手のひらを合わせ、指をからめて、バラの香りが一際鮮やかになった。

唇が。

重なる……、そう思ったとき、璃桜は瓜生津の手をふりほどもき、ボールルームへ向かって走った。

「璃桜ッ！」

責めるような瓜生津の声。

口元を押さえる。彼女の唇は、璃桜の唇をわずかにそれ、口の端をかすめていた。でも今は。
今、会いたいのは。

広間のドアを開け放つ。ざわめきが一層大きくなり、どよめきとなった。

「……さっちゃん」

夏木咲也がいた。着飾った男女がひしめく中で、普段着のままですれども、その中の誰よりも鮮明に璃桜の瞳に映り込む。

よほど急いで来てくれたのだろう、乱れた髪と、わずかに上がった呼吸のまま、

「璃桜、お待たせ」と、夏木はいつものようにこちらに向かって手をさしのべてくれる。

それは、今夜、璃桜に向かって差し出された手の中で、もっとも優雅で、もっとも優しい仕草だった。

「おそいわ、さっちゃん」

夢みたいだ。

夢じゃ、嫌だ。

そう思いながら夏木の手を取る。馴染んだ体温が本物だ、と伝えてくれる。

「今夜はもう、会えないかと思った」

自分の言葉に、またじわりと涙がにじみそうになる。「ごめん」という囁きを耳元で聴いて、耐えきれずにぎゅ、としがみつく。夏

木の手が、背中に流れた髪を愛しむように撫でてくれた。

それだけで、心から待っていてよかったと思った。

「今夜は一段と、綺麗だね」

ため息を呑みこむように、夏木は璃桜のドレス姿を褒めてくれる。純白のドレスは金の繊細な刺繍がほどこされ、細く絞られたウエストの部分から裾にむかってふわりと広がっている。「ウエディングドレスみたい」

夏木は、そう言っすこしだけ目を細めた。どこか、切ない声が璃桜の心をざわざわと騒がせる。

「さっちゃんもきつと、ドレス似合うわ」

「素敵なドレス、送ってくれたのに着れなくてごめん。仕事が長引いて、」

「うっん、いいの。いいのよ。今夜来てくれただけで充分。それに……さっちゃんのドレス姿は、私だけが見るからいいの」

「璃桜」

「……皆、見てるよ」

「こんな格好で来たから」

夏木はきまり悪そうに、自らの飾り気のないシャツをひっぱってみせる。スーツ姿の夏木は確かに周囲の注目を集めていた。ざわめきの代わりに、今は女生徒たちの熱っぽい視線がそそがれている。皆、夏木から目を離せずにいる。それは彼女の格好のせいではなく、彼女自身の見目と高校時代から変わらない存在感のせいだったけれど、璃桜はただ微笑んで否定するにとどめた。

「せっかくだから、見せつけることにしようかしら」

くすくす、笑う。本当は昔から、ずっとそうだった。大事にされている、自覚も自信もある。自惚れでなく、自他ともに認める「夏木咲也の一番」はいつも自分だった。

「璃桜」

夏木がうながすように声のトーンを変えたので、振り返ると瓜生津が立っていた。瓜生津は夏木の前に右の拳を突き出した。指の隙

間から手品のようにクローバーのネックレスが下がる。

「それは……」

「落し物だよ」

「届けてくれてありがとう」

璃桜が息をつめて見守る中、ネックレスが夏木の手に渡される。

ピン、と鎖が張った。瓜生津の指はまだ、鎖にからんだままだった。

「そう、貴女が、璃桜の王子さまか。——名前、何ていうの」

「夏木咲也」

パシッという乾いた音が響いた。瓜生津の右手が、夏木の頬を打った形のまま緩慢に空中で止まる。

「瓜生津さん！」

「お姫様は黙っていて」空いた左手が伸ばされ、人差し指が璃桜の唇をそつと押さえる。しかし実際に璃桜を黙らせたのは、瓜生津との接触を阻むように持ち上げられた夏木の右手にだった。

「王子さまっていうより、騎士だね、君は」夏木の仕草に、瓜生津は冷笑で応える。

夏木は目の上にかかった髪を直すでもなく、切れた唇を気にするでもなく、ネックレスが壊れていないことを確かめると、それを璃桜に渡した。

「……さっちゃん」

「瓜生津さん、だっけ」

「そう。謝らないよ。君は、僕に君を殴らせるだけのことをした」

大広間はすでに、ざわめきを通り越し水を打ったように静まり返っていた。ボーイまでもが足を止め、ことの成行きを見守っている。オーケストラのメンバーが驚いた顔で彼らの指揮者と、対峙した麗人を見比べる。

最初に動いたのは璃桜だった。

胸元を飾っていた深紅のバラを瓜生津の顔に向かって投げ捨てる。血のような花びらが零れ落ちる。そのまま振り上げた手を、瓜生津は避けようとはしなかった。

しかし、その手は振り下ろされることはなかった。夏木の手に手首を掴まれ、後ろから抱きすくめるようにして腰に腕がまわされる。

「ダメだよ、璃桜」

「離して」

「手をあげないと約束するなら、離してあげる」

「どうしてダメなの。さっちゃんを叩いたのに、どうしてダメなのっ」

「落ちついて、璃桜」

「離してあげなよ」

夏木が初めて、瓜生津を睨んだ。

「なんだ、そんな力才も出来るんじゃないか。甘いばかりの騎士様かと思つたのに」

「それなら君は何？」

「僕は道化師。そしてトリックスター。お姫さまが笑ってくれたら僕の勝ちだ。……騎士様はどうやら、お姫さまを泣かせてばかりのようだからね」

瓜生津の暴言に先に我慢の限界を超えたのはまたしても璃桜だった。

「口を慎みなさい。貴女にそんなことを言う権利などないわ」

「そう。貴女は本来そういう女性だ。人の上に立ち、人に命じることと慣れたお姫さまだ。それがどうして、騎士などに惑わされているの？ 悪い魔法に、かかっているみたいにさ」

早く目をお覚ましよ、と。瓜生津は微笑んだ。

「璃桜、挑発に乗ってはだめだ」

「だって、さっちゃんのことを、悪く言ったのよ！ 私は、大事な人をけなされて、それでも我慢しなくちゃいけないの?!」

「璃桜、いいから、こっち見て」

その時璃桜はようやく、自分が夏木に背中から抱きしめられていることに気付いた。

身体を通して直接伝わってくる夏木の声は、静かで、優しく、その言葉は本物の魔法のように、璃桜の身体を夏木の方へ向き直らせてしまう。

「さっちゃん……」

「私のために怒ってくれてありがとう。平気だよ、痛くない」

それを証明するように、夏木は璃桜の指先が頬に触れてくるのを拒まなかった。

前にもっと、私がひどく叩いたことがあったつけ。そんなことを唐突に思い出した。指が感じる体温に、気持ちが触発されて感情が蘇ってくる。

あの時の苦しさ、似ていると思った。

同時に、自分は、この人に、他人が触れることすら許せないのだと思い知る。

「私が本当にお姫様だったら、首を刎ねてと叫んでいるわ」

「ハートの女王？ アリスだね」

夏木はくすりと笑いながら、璃桜の乱れた髪を直してくれる。梳る手が髪を離れてドレスの胸元でとまった。

「璃桜、お姫様には、王子様が必要だ」

「なぜ、今、それを言うの」

「……さあ。今夜の君が、本物のお姫様みたいに見えるからかな」
「私は、お姫様なんかじゃないわ。そうなりたいと望んだこともない」

「知っているよ」

「仮に私がお姫様なのだとしたら、さっちゃんは王子様になってくれる？」

一歩離れて、手を差し伸べる。

夏木の左手がその手を取り、右手が腰を引き寄せる。プロムナードポジションを取った次の瞬間に、音楽が始まった。いつの間にか瓜生津が指揮台の上に立っている。クラシックではない、映画のバックミュージックに使われた、ヴォーカル入りのスロウなワルツ。そのメロディラインをヴァイオリンが紡ぐ。

夏木のリードにぴたりと寄り添って、最初のステップは深く。そこから先は流れるように。

ナチュラルターンからリヴァースターンへ。

オープン、そしてクローズ。

引き寄せられる際のフルターン。そこで夏木の腕に背中をあずけて髪が床に触れそうなほど後ろへ。

ボールルームのここから歓声がわく。ドレスの裾が翻る。ふたりの踊る様は、頭上から見下ろせば白い大輪のバラが咲いたように見えるだろう。

小さい頃からダンスのレッスンの相手はいつも夏木だった。お互いの癖も、呼吸も、タイミングも知り尽くしている。

身体が軽い。

夏木と踊るときはいつもそう感じる。

夏木は完全に璃桜に合わせてくれる。それでいてリードに迷いは一切感じさせない。

まだ終わらないで。お願い。と、璃桜は祈る。

最後のワンフリーズまで踊らせて。

瓜生津はその才能を遺憾なく発揮してくれた。指揮者に引きずら

れてオーケストラがひとつになる。

それでも五分強の短い曲はあつという間に終幕を迎える。

ゆっくりと消え入るように引いていく音。それが完全に聴こえなくなつた数秒後、ボールルームは大きな拍手に包まれていた。

璃桜は鳴りやまない拍手の中で、夏木の手を離せずに行った。

「さっちゃん、私、お姫様なんかになりたくない。王子様も知らない。……あなただけ、欲しいの」

「私はいつでも、君のものだよ」

優しい声だつた。聴きたい言葉だつたはずなのに、聴いてはいけない言葉だつた。

「それはっ」

あなたが、私に、『与えられた』代償だから。

それ以上夏木の声を聴いていられずに、璃桜は自分から手をふりほどくと逃げるようにボールルームを飛び出した。その背中を追つて、十二時を告げる時計の音が、長い尾を引いて鳴り響いていた。

いつそ、シンデレラのように魔法がとけてしまえばいいのに、と思った。そうすれば、少女は元の灰かぶりに戻れる。

綺麗なドレスも、ガラスの靴も、カボチャの馬車もいない。

王子様のキスもいない。

「……璃桜」

背中から夏木の呼ぶ声がする。すぐに追いかけてきてくれた、その安堵と伝わらないもどかしさで呼吸が苦しかった。

「こないで、さっちゃん……」

近くに来られると苦しい。傍にいたいのに。いて欲しいのに。どうしても最後の距離が縮まらない。

その現実に潰されそうになる。

靴が土を噛む音がする。すぐ後ろに夏木が立っている。手が伸ばされたのを感じて、びくりと身体がすくんだ。

「じつとして」

囁きが耳を舐めた。背後から正面に回された手は、首の後ろでとまり、背中にかかった長い髪をさらりと流して離れる。

「これ……」

自分の胸元を、小さなネックレスが飾っているのに気付く、璃桜は思わず振り返る。

「やっと思えた」

夏木がいたずらっぽく笑う。

「……さっちゃん」

「これはドレスには合わなかったね。残念だけど」

「そんなこと、ないわ」

「ほら、高校入学の時に贈られた真珠、あれなんかきつと、」

「私はこれがいいの」

「……璃桜。君が気に入ってくれたなら、嬉しいよ」

夏木は何か言いたいことを呑みこんだようだった。「それじゃあ、今夜は帰るね」

十二時の鐘が鳴ったのだ。

「待つて」

「璃桜」

「今夜は帰らないで。一緒にいて。明日も明後日も」

「無理だよ、仕事があるもの」夏木がなだめる。

「じゃあ辞めて。一緒に学校に行きましょう。さっちゃんは、私のものなんでしょう？」

「璃桜、また会いに来るから」

「……冗談よ。無理を言っでごめんなさい、さっちゃんの困った力オが見たかっただけ。さようなら」

璃桜は夏木に背をむけた。

棒読みになった別れの言葉は、幼い子供の演じる拙い劇の台詞のようだった。

早く。早く。私がこうして背中を向けている間にいなくなって。投げやりな気持ちは失意の裏返し。

とても力才を見てさようならなんて、言えやしない。

これ以上、夏木の意に染まないことを強要するわけにはいかない。そう、想っていたのに。

「璃桜」

背中からぎゅっと抱きしめられて、どうしていいのかわからなくなる。

「ごめんね」

抱擁は一瞬。

首筋に押し当てられた熱い唇の感触は、それよりもさらに刹那。気づけばひとり、ぼんやりと中庭に立ちつくしていた。

「紅薔薇姫、^{ミス・ルージュ}こんなところにいたら、風邪をひくよ」

そう言つて、柔らかなシヨールを肩にかけてくれたのは瓜生津だった。蝶ネクタイだけ外しているが、まだ燕尾服のまま、髪が汗に濡れていた。

「私は、」

「紅薔薇姫だよ。今年のプロムのクイーン。さつき決まった。満場一致だったのに、主役がどこにもいないんだから、締まらないったらなかったよ」

「そう……ごめんなさい」

「ずいぶん素直だね」

瓜生津の言葉を否定するでもなく、璃桜はシヨールに覆われた自分の肩を抱いた。寒いのではなく、寂しいのだ。

「……ロミオとジュリエットじゃあるまいし。僕はバッドエンドなんて見せられるの、ご免だよ」

「瓜生津さん」

「僕が王子役に立候補したいところだけど、お姫様は騎士様がお望みのようだし？」

元気だしなよ、と。瓜生津は続ける。「貴女はハートの女王様みたいにふるまっているくらいで、ちょうどいいよ」

「それじゃ嫌われ者ね」

「不思議なんだけどね、貴女がすると、許してしまえるんだよね。どうしてだかわからないけど。あ、そうそう、これを渡しに来たんだよ」

瓜生津は上着のポケットから二枚の紙切れを取り出した。

「次の定期公演の特等席。空いてたら恥ずかしいから、ぜったい来てよ。二人分だからね」

「私に？」

「貴女と、貴女の騎士様に」

「……ありがとう」

「でも覚えておいて。僕、貴女のこと諦めたわけじゃないからね。大好きだよ、お姫様」

瓜生津はつま先立つと、ちゅ、と音を立てて璃桜の頬にキスをした。

「じゃあね！ 僕、後片付けあるから戻るね！」

怒られると思ったのか、瓜生津はさっと離れると、そのままバラのアーチをくぐって校舎へと走っていった。

初夏の夜風が花びらを揺らす。

璃桜は脱兎のごとく去って行った瓜生津の後ろ姿を見ながら、「チケットとシヨールで、首を刎ねるのは帳消しかしら」と呟いた。

この時まだ、夏木の「ごめんね」の本当の意味を、璃桜は知らない。

4 (後書き)

伝えたい言葉は、「ごめんなさい」なのか「ありがとう」なのか、それが問題だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3609/>

サンドリヨン

2010年10月8日14時58分発行